

# 森の僧から学ぶこと

おかべ まゆみ 岡部 真由美 中京大学准教授

## 僧侶と禁欲のイメージ

「タイの僧侶って肉を食べないのでしょ？」。日本で、わたしがタイの僧侶について研究していますと言うと、かなりの割合で返ってくるのがこの一言だ。たしかに、スリ

ランカを経由し、東南アジア大陸部に広まった上座部仏教の伝統には、菜食を貫き、瞑想を続けながら森のなかで修行する、森林僧の系譜がある。しかしこれは全体からみれば少数派である。大多数の僧侶は厳格に戒律を守るものの、村の近くの寺に居住し、村人たちの日々の暮らしと密接に結びついた社会的役割を担っている。それでもなおわたしたちは、上座部仏教の僧侶に対してどこか禁欲のイメージを抱きがちなのである。

## 森のなかでの出会い

タイ北部最大の都市チェンマイ周辺の山々は、深い森に覆われている。この森はかつてより、森林僧にとって絶好の修行の場であった。約一〇年前、調査のためにチェンマイ市街地に滞在していたわたしは、時折、こうした森へ出かける機会に恵まれた。すると森のなかで、偶然その場をとおりにかかる森林僧たちに出会うことも珍しくはなかった。遠く離れたタ



修行の合間に電話で話す相手は誰でしょう？

イ中部や東北部、さらにはラオスやミャンマーからもやって来る彼らは、陽に焼けた身体に、薄汚れた黄衣を纏い、最低限の生活用品だけを携えて、道なき森をひたすら歩く。その姿は、俗世を捨てて修行に勤しむ僧侶の理想像そのものに見えたものである。

## 一本の電話

「山を下りて街へ出てきたよ。会いに来てくれるかい？」。市街地での日常に戻っていたわたしのもとに、不意にこんな電話がかかってくるがあった。番号は見知らぬ携帯電話か公衆電話。相手が誰なのか見当もつかぬまま耳を傾けていると、次第に記憶が蘇ってくる。声の主は何か月も前に森のなかで出会った森林僧だった。本のなかでしか知りえなかった森林僧に出会ったときのわたしは、その喜びから目をキラキラさせていたのだらうか。邪念を抱かせ、修行の邪魔をしてしまったのかもしれない。落胆すると同時に反省もさせられた。とはいえ、こうした電話は何より、森林僧と禁欲のイメージを安易に結びつけることの危うさをわたしたちに教えてくれるのである。